

現在は社会参加しているが二次障害を併発した経験のある 生徒への子育てに関する母親の心理的変容

—— 母親のインタビュー調査を通して ——

Psychological Transformation of Mothers About Child-Rearing for Students Who Are Currently Participating in Society But Have Experienced Secondary Disabilities : Through Interviews With Mothers

奥野 伊寿美

Izumi OKUNO

(和歌山県立紀伊コスモス支援学校)

武田 鉄郎

Tetsuro TAKEDA

(和歌山大学)

2019年10月11日受理

要旨

現在は社会参加しているが、発達障害、軽度知的障害の二次障害により集団参加、情緒不安定で困難を抱えている生徒の母親に対して、子育てに関する半構造化インタビューを通して、二次障害に陥った我が子に対する母親の心理的変容を仮説生成し、支援の在り方等考察することを目的とした。インタビュー内容を質的に分析した結果、51個の概念、18個の категорияが生成され、これらを構成する8個の categoria グループが生成された。「子育ての不安」や専門家からの否定など「マイナスのソーシャルサポート」が、母親の不安をさらに増幅させ、専門家との距離を置き相談しにくい状況にさせてしまうが、我が子を褒めてもらったり認めてもらったりする「プラスのソーシャルサポート」を得ながら母親は、専門家から「子どもへの告知」してもらったことをプラスと考え、「奮闘する子育て」をし、「子どもの成長で母親も安定」し、悩みながらも「将来の希望」をもって養育できるということが明らかにされた。しかし、「将来への不安」も常に感じていることが明らかにされた。保護者との連携には、子どもが褒められ、認められるような肯定的なサポートが重要であり、二次障害に陥り学校生活に困難を抱えていた生徒の母親の子育てに関する気持ちの変容過程から、子どもの成長が養育レジリエンスを高める可能性があることが示唆された。

キーワード：発達障害、軽度知的障害、二次障害、自尊感情、ソーシャルサポート

I 問題と目的

近年、特別支援学校の高等部において軽度知的障害のある生徒が増加してきている。

熊地ら(2012)は、知的障害支援学校教員を対象とした「全国の知的障害支援学校のアンケート調査」より、自閉症スペクトラム障害の人数が全体の6割近くを占めていること、特別支援学校に在籍している発達障害児の多くが小・中学校で二次障害を発現させ、そのまま転入学しているケースが多いことを明らかにしている。転入学の原因として、学業不振・学習困難に加え、対人関係の不適応行動、不登校・引きこもりなど二次障害が多数を占めていたことを報告している。

また、こうした発達障害児が在籍している特別支援学校では、指導や対応に苦慮し、教職員の専門性や校内支援体制に多くの課題を抱えているとされている。

また、鈴木・武田ら(2008)は、特別支援学校(病弱

に在籍する生徒の11.4%がLD・ADHD等(もしくはその疑いのある)で適応障害のある生徒でその割合は3年間でほぼ倍に増加していると述べている。転入時の指導上の問題には「対人関係」「情緒の安定」「集団参加」「安定した登校」に関する問題が大きく、著しい情緒不安定、パニック、トラウマ、攻撃的な行動、対人トラブル等もあげられている。

トラウマを抱えた生徒がどのように自尊感情やレジリエンスを高めていったかという研究はほとんど見当たらず、実際に社会参加をしている事例を通して生徒が心理的問題にどのように対処し、保護者や教師はどのように支援すべきかを明らかにする必要がある。

そこで本研究では、現在は社会参加しているが、発達障害、軽度知的障害の二次障害により自尊感情の低さや集団参加、情緒不安定で困難を抱えていた生徒の母親に対して、子育てに関する半構造化インタビュー

を通して、インタビュー内容を質的に分析し、母親の子育てに関する気持ちの変容過程を明らかにすると共に、支援の在り方について考察することを目的とする。

II 方法

1. 対象者

本研究の調査対象者は、トラウマを抱え不適応状態である軽度知的障害のあるA子(19歳女子)のその母、A子の特別支援学校中学部・高等部時代の担任教師(本研究)と、同じく、トラウマを抱え不適応状態である自閉傾向のあるB男(19歳男子)とその母、B男の特別支援学校高等部時代の担任教師である。

2. 使用した質問紙

生徒には、Teacher's Report Form(TRF)、TSCC-Aの質問紙を用いた。

ASEBAのTRFとは、アメリカの心理学者のT. M. Achenbachらが子どもの行動や情緒の特徴、および多面的な問題性を評価する客観的アセスメント指標として開発した、心理社会的な適応/不適応状態を包括的に評価するシステムである。また、子ども用トラウマ症状チェックリスト(TSCC: Trauma Symptom Checklist for Children)は、Briereによって作成された、自記式質問用紙であり、トラウマ性の体験の後に生じる精神的反応や心理的症状の評価を目的としている。TSCCは54の質問項目からなり、過少反応(UND)尺度と過剰反応(HYP)尺度の二つの妥当性尺度と、トラウマ体験に起因すると考えられる六つの臨床尺度が設定されている。臨床尺度には、不安(ANX)尺度、抑うつ(DEP)尺度、怒り(ANG)尺度、外傷後ストレス(PTS)尺度、解離(DIS)尺度、性的(SC)関心尺度がある。今回は、子どもに対して性的な内容を質問することに抵抗する場合に使用する性的関心尺度を含まない44項目のTSCC-Aを使用した。

3. データ収集方法

母親に対し1対1の半構造化面接技法を用いてインタビューを行った。半構造化インタビューで得られたデータから逐語録を作成し、得られた記述をコード化して、母親のそれぞれの思いを抽出することで内容分析を行った。子どもを育ててきた中で心理的変化や「こうしてほしかった」という支援への要望などを含め、子育ての過程における質問を中心に用意したが出来る限り調査対象者が自由に語ることができるように心がけた。分析は木下(2003)の修正版グランデッド・セオリー・アプローチを用いた。

本研究では、発達障害の二次障害に陥った生徒の経験を保護者の目から見て、彼らや保護者がどのような問題に直面し、それらの段階においてどのような支援を必要としていたかを明らかにする。またどのような

支援によって彼らが自己実現のためのスキルを身につけていったのか、母親の語りの中から概念を見出し、その主観的経験を明らかにすることを目的としている。一人の発達障害である子どもをもつ保護者の苦悩や悲しみなど、人間の様々な感情や認識、また、発達障害の子どもとともに歩んできた親の生きてきた現実を多面的に理解するためには、既成の概念によってではなく、親自身の語りの中に説明概念を見出し、そこからその経験をとらえていく必要があると考えたからである。このような調査者ではなく調査対象者の視点から現象を理解しようとする視座が質的研究法の特性である(三輪, 2010)。

4. 倫理的配慮

本研究は、個人情報および倫理面に配慮し行った。調査対象者に対しては、事前にインタビューの目的、方法について文章を用いて説明を行い、インタビューの参加は自由であること、個人や機関が特定されないためのプライバシー保護に関する倫理的配慮、データは研究発表の目的以外では使用しないこと、インタビューへの同意後でも随時撤回が可能であること、フィードバックの仕方等について明記した調査依頼書を、調査者の目前で文書と口頭によって説明を実施し同意を得た。

III 研究過程と結果

1. 対象者である2人の母親の気持ちの変化を表したライフイベントと子どもの適応状況

(1) A子

① A子のTRF、TSCC-Aプロフィール結果

A子が高等部1年生時と3年生時のプロフィールより、1年生時、TRFは、「内向尺度」「外向尺度」「総得点」とともに臨床域であった。下位尺度のうち、「社会性の問題」については臨床域であった。また、「不安/抑うつ」「思考の問題」「攻撃的行動」については境界域であった。不適応状態であり、配慮の必要な生徒であった。しかし、3年生時には「外向尺度」のみ境界域であったが、他は全て正常域に改善していた。

TSCC-Aについては、「不安(ANX)」「抑うつ(DEP)」「怒り(ANG)」が準臨床域であった。なお、A子の知能指数は、WISC全検査IQ68である。

② 母の心理状態

A子は身体が小さかったこともあり、幼いころは何でも「まだ小さいから」と済まされていた。てんかんの発作を常に起こしていたため、母は病気について心配し、知的な遅れがあることについては認めたくない気持ちからそれに気づかないふりをしていた。

小学校に上がりA子に数の概念がないことが分かり、ショックを受けたという。また、毎日続く夜尿に悩む

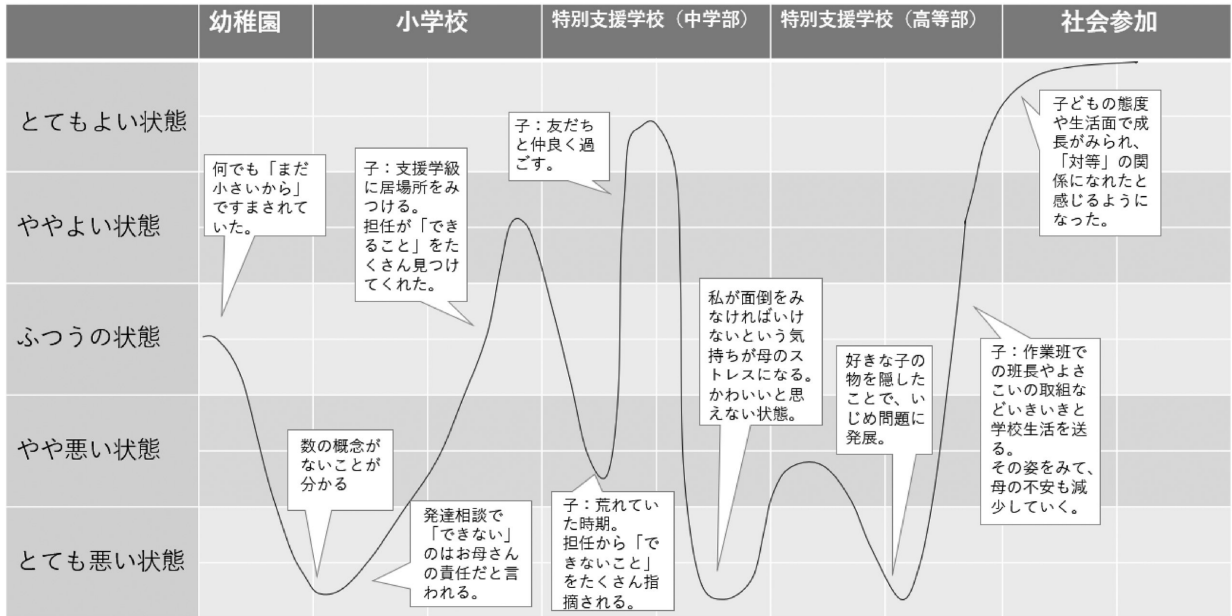


Figure 1 A子の母親の気持ちの変化を表したライフイベント図

日々を過ごし、それは中学2年生まで続いた。1年生から通常の学級に在籍していたが、5年生で特別支援学級に在籍した。5年生の担任の先生からA子の良いところをたくさん教えられることで母も少しA子のよさを認め穏やかな気持ちになる。同じく5年生で教師に勧められて療育手帳を取得するが、知的障害であることを受け入れられず過ごしてきている。

中学生になると特別支援学校に進学するが、担任教師からA子ができない部分をたくさん指摘され、落ち込む。子どもが高等部に進学してしばらく、いじめ問題があったり、母親に対する反抗がひどくなったりし

て母の心理状態もかなり悪い状態となった。中学3年時に、「A子のことを愛せない」と泣きながら担任に訴えたこともあった。高等部3年生で、サッカー大会で活躍したり、学部で取り組んでいる「よさこい」などに参加したりして積極的に活動している子どもを見て、母も安心し、学校生活を楽しんでほしいと願う。

卒業後は、作業所で働く我が子が好きな仕事内容で認めてもらうこともでき、十分な満足感を得ていると感じている (Figure 1)。家庭においても役割があり、家族の一員としてなくてはならない存在だと感じ、「対等」の関係になれたと感じるようになる。とてもよい

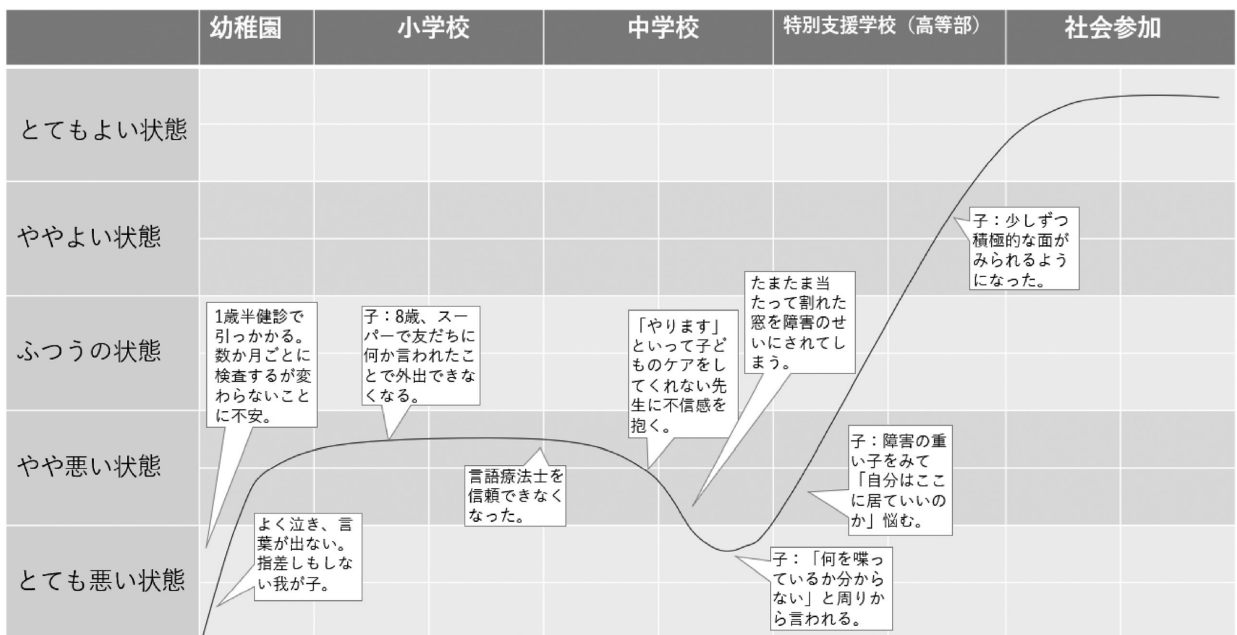


Figure 2 B男の母の気持ちの変化を表したライフイベント図

心理状態である。現在A子は、作業所で継続して就労を続け、休日は友人と出かけるなど適応状況は良好であり、母子関係も良好である。

(2)B男

①B男のTRF、TSCC-Aプロフィール結果

B男のTRFの分析結果については、1年時は、「内向尺度」が臨床域であったが、3年生時には全領域において正常域となった。TSCC-Aについては、「不安(ANX)」「抑うつ(DEP)」が準臨床域であった。なお、B男の知能指数は、WISC全検査IQ75である。

②母親の心理状態

B男の気持ちを受け止めつつ、B男とそりが合わない父親とをつなぐ役割も担っている。父親は育児に対して熱心だが、一方的であり、B男の意に沿わないことを押しつけるところがありB男と合わないことがある。

B男は、幼いころはよく泣き、指さしがなく言葉があまり出ないため、母親は、子育てに大きな不安を感じていた。地域の保育園に通う頃から、言葉が出始め少し安心したという。小学校入学前には校長にB男について話したり、3年生くらいまで何度も手紙や話をしたりするなど、学校に対してB男の障害特性について理解を求めてきた。中学校でも同じく理解を求めたが、入部したクラブでトラブルがあり、B男が原因のようにされたことで母親は悩む。B男が精神的にしんどくなると、母にイライラをぶつけ常に聞き役となってきた。

卒業後は、就労移行事業所へ進路をすすめ、現在は就労し製造業に就いている。適応状態は良好である。

2. インタビューの概念化からカテゴリー、カテゴリーグループへの統合

分析の結果、51個の概念、18個のカテゴリーが生成され、これらを構成する〔子育ての不安〕〔ソーシャル

Table 1 カテゴリーグループとカテゴリーの定義

カテゴリーグループ	カテゴリー名	カテゴリーの定義
I 子育ての不安	A 不安と心配な子育て	子育ての上で抱く不安が、蓄積されていくこと
	B 子どもが同級生からいじめや嫌がらせを受け、悩む母	子どもが不安がる様子を受け、母親も不安になること
II ソーシャルサポート(マイナス)	C 教師や専門家から養育を否定された母	養育を否定されたり、言動などから教師や専門家を信頼できなくなる
	D 情報をもらえるところが分からない母親	どこに相談してよいか分からず、振り返るとあまり相談できていないと感じていること
	H いじめと捉えられ複雑な気持ち	納得はいかない部分もあるが、いじめられたとされる相手の気持ちも分かるから、うちの子は悪いととらえたこと
	P 父親と協力できればよかった	振り返って、父親と相談、協力して子どもに関われば、もう少しうまくいったと思うこと
III 将来への不安	G 障害のある子どもをもつ母親の将来への不安	障害のない子の親とは悩みのレベルが違うと思っていること
IV ソーシャルサポート(プラス)	K 我が子を褒めたり認めてもらって励まされた母親	子どもが褒められ、良い方向に変わる様子を見て、母親も安心したり、気持ちが楽になること
V 子どもへの告知	L 子どもへの告知が良かったと思う母親	専門家から適切な時期に子どもへ告知してもらったことが良かったと感じていること
VI 奮闘する子育て	E 子育てが上手くいかず、重荷・責任感を感じて悩む母親	子どものしんどさに直面する度に、母もとまどうこと
	F とまどいながら何とかしようと努力する母	状況改善に向けて奮闘しようとする
	O ストレスを溜めないように心がける母親	母親の不安な気持ちを発散すること
VII 将来の希望	N 将来を考え子どもには一人前になってほしい	親がいなくなった後も生活できるよう、子どもには成長してほしいと願うこと
VIII 子どもの成長で母も安定	I 子どもが安心して自分で安心する母親	子どもに友だちができたり、夢中になれることがあることで、母親も安心すること
	J 活躍する子どもの成長を喜ぶ母親	我が子の成長を感じ、将来への不安が少し和らぐこと
	M 対等になってきた母子関係	社会人になり、子どもが安定している様子から、子育ての重荷が減ったと感じること

サポート(マイナス)〔将来への不安〕〔ソーシャルサポート(プラス)〕〔子どもへの告知〕〔奮闘する子育て〕〔将来の希望〕〔子どもの成長で母も安定〕の8個のカテゴリーグループが生成された。

母親の気持ちは、漠然とした{I 子育ての不安}から友だちとの関係で子どもが辛い経験をするによりさらに強い{I 子育ての不安}となっていく。そのような中で、よき理解者となる専門家や教師に出会うことで{II ソーシャルサポート(プラス)}{V 子どもへの告知}、不安も一時和らぐが、母に寄り添えない専門家や教師との関わり{IV ソーシャルサポート(マイナス)}によって、心理状態が悪化する。子どもに障害があることで、通常の子育てよりも重荷や責任感を感じ母親に大きな負荷がかかってくる。それでも何とかしようと{VI 奮闘する子育て}をし、子どもに不安なことがあると母親も不安になるが、{VIII 子どもの成長で母も安定}する。子育てに対する重荷や責任感、子どもが働き始めたことで、立場を「対等」と考えられるようになり、{VIII 子どもの成長で母も安定}につながっている。子どもが自分の手から離れても、生きていけるようになってほしいと{VII 将来の希望}のが持てるようになる。しかし、障害がある子をもつ親ならではの{III 将来への不安}は常に感じている。不安と安定や希望を繰り返しながらも、現在の母の心理状態は比較的よい状態で保たれている。

IV 考察

現在は社会参加しているが、発達障害等の二次障害

により自尊感情の低さや集団参加、情緒不安定で困難を抱えていた生徒の母親に対して、子育てに関する半構造化インタビューを通して、母親の子育てに関する気持ちの変容を明らかにすると共に、二次障害の生徒に対する教育支援について検討し考察する。

〔I期 子育ての不安〕

I期は、漠然とした{I 子育ての不安}から友だちとの関係で子どもが辛い経験をするによりさらに強い{I 子育ての不安}となっていく。また、母に寄り添えない専門家や教師と出会い、{IV ソーシャルサポート(マイナス)}によって、母親の心理状態が悪化してしまう。子どもは、周りとの関係性の中で学校や家庭などで困ることが多々ある。子どもが困ることで、養育者は悩むことが多い。また、養育者は子どもに関わる問題に対応する必要があり、精神的な問題を抱えるリスクが高いとされている(鈴木,2017)。また、母親の最も本質的なストレスは、社会の無理解や偏見、援助のなさや冷淡さから起こる社会的圧迫感と、障害のある子どもを持つ負担感だと言われている(尾野,2017)。母親は子育ての中で、育てにくさや違和感を持ちながら、漠然とした不安を抱く。このような状態で学校や家庭外で起こるいじめや嫌がらせを子どもが受け、子どもは集団参加ができなくなったり、情緒が安定せず母親にイライラをぶつけたりするようになる。時には攻撃的な行動がみられるなど二次障害を併発している子どもと向き合わなくてはならない。周りにうまく適応できていない子どもの状態を見ることや、

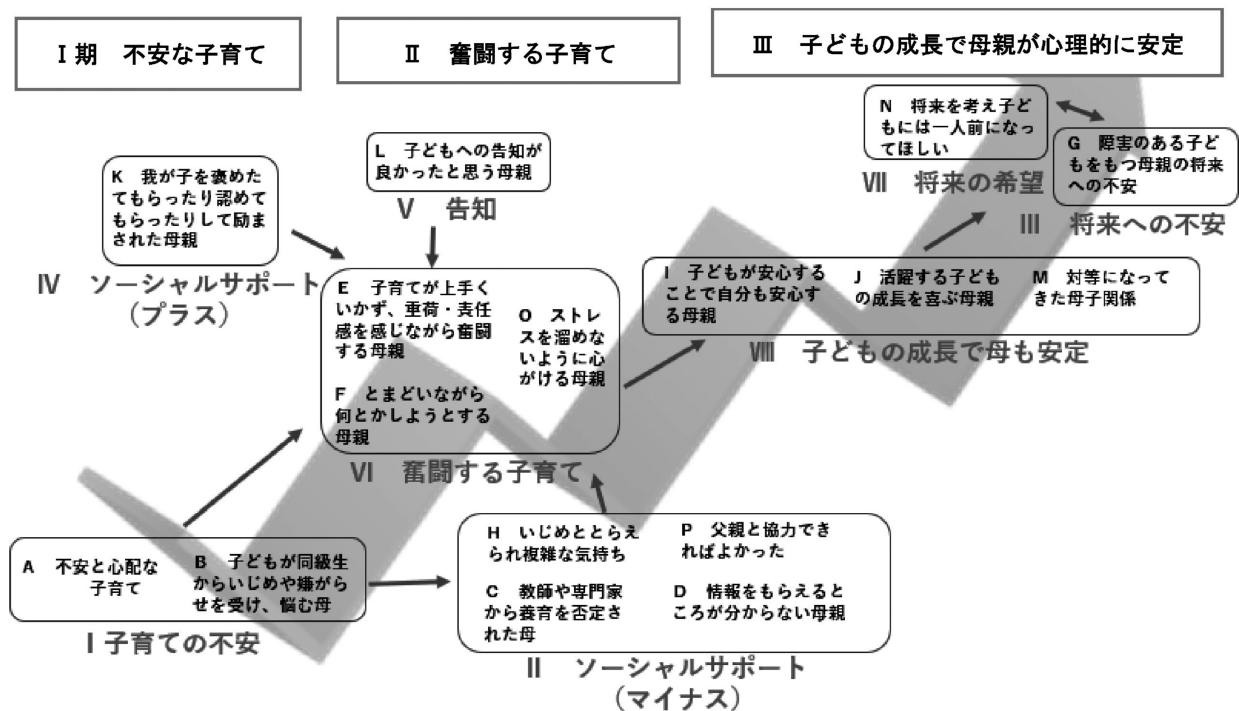


Figure 3 発達障害等の二次障害により自尊感情の低さや集団参加、情緒不安定で困難を抱えていた生徒の母親の子育てに関する気持ちの変容過程

学校からのトラブルの連絡を受け、母親の不安は高まり、ストレスが蓄積されていく。そのような状況の中で、教師や専門家から養育を否定される、見放されたと感じるような言動を受ける(マイナスのソーシャルサポート)など、相談するところが分からずに母親が一人で子育てのしんどさを抱え込んでいる状況が明らかとなった。子どもに障害があることで養育者としての責任が重くのしかかり、主体的に子育てをするという気持ちに余裕がない時があった。

また、知的障害として療育手帳を取得したが、詳しい説明を受けずに過ごしてきた経緯が明らかにされ、早期の診断、対応や特性など障害への説明が丁寧になされる必要があることが再確認できた。また、途中で診断名が変わったという語りもあり、結果的に変更後の診断名の方が養育者には納得できるものであった。このことから、最初の診断時に養育者が納得できるような説明がなされていない可能性が見えてくる。

社会的支援として、不安をかかえての子育てにおいて、支援者は養育者の気持ちに寄り添い丁寧なサポートが必要不可欠であると考えられる。

〔Ⅱ期 奮闘する子育て〕

母親も子どもも不安な中でも戸惑いながら何とかしようとする母親の姿があり、同じように悩みを抱える母親同士で相談ができることや、子どもが褒めてもらったり認めてもらったりするなどの教師や専門家の関りが母親の気持ちを安定させる。子どものがんばりの認知や、子どもとの連帯感、奮闘する子育てをする中で、子どもにできることが増えることや養育者の予測を超えるよき出来事などがあると、母親自身もがんばろうと思えていることが明らかにされた。

母親たちに共通することは、母の子育てに関する自己効力感が低めであることである。母親が子どもに対して何もできていないなどの語りから支援者は子どもに対して、教師や専門家が養育者でしかできない、養育者ができているよき事柄を言葉に出し伝えることで、養育者の自己効力感を高めることにつながると考える。

母親が学校などに配慮を求めてきたことを教師が受け止め、適切な対応がなされることや、子どもを肯定的に見てできたことを褒め、課題があることについては母親に責任を負わず家庭で必要な支援、学校で必要な支援について共に考え、方向性を決めていくことが必要となる。

〔Ⅲ期 子どもの成長で母親が心理的に安定〕

子どもに友だちができたり、夢中になれることがあることによって母親も安心したり、活躍する子どもの成長を見ることにより、将来への不安が和らいでいく。また、子どもが社会人になり安定して生活を送っている様子を見て、対等な関係と思えるようになり子育ての重荷

が減ったと感じることが母親の語りから明らかにされた。

子育ての中で母親は子どもへの理解が深まり、子どもの障害に関する知識を得ていく。子どもの特徴理解が深まり、社会的支援が十分にあると見通しが立つようになる(鈴木, 2017)。また、子どもに対して自分自身ができることがあると感じ(子育ての自己効力感)、今までの養育を振り返り、子どもの成長を見ることでこの自己効力感が高まるものと考えられる。子どもの感情を言語化することや子どもがサポートを受け入れ、相談することを通して成功体験を積むこと、心の回復力を育てることなど二次障害に陥った子どもへの支援と、その養育者への支援、両方への支援を行うことの重要性が明らかになった。その際、福祉、教育、医療などの関係機関は、「協働チーム」として同じ目標、方向性をもって支援していくことが重要である。

Ⅶ 本研究の限界

理論的飽和に達するまで、すなわち、理論やモデルが形をなし、それを使えば新たなデータも説明ないし了解が可能になるまで、サンプリングは続けられることになる。理論的飽和とは、カテゴリーを発展させる中で、これ以上新しい特性、次元、あるいは関係が生じてこなくなる分析上の一時点である(Strauss & Corbin, 1999)。しかし、本研究において発達障害や軽度知的障害の二次障害に陥っていたが、現在、就労ができていて社会的に適応状態にある子どもの母親にインタビューが可能であったのが2人だけであった。理論的飽和に達するには十分に至っていない可能性がある。今後、同様の研究・分析を続けていくことでより確かな仮説生成を行っていききたい。

【文献】

- 熊地霈・佐藤圭吾・斉藤孝・武田篤(2012)特別支援学校に在籍する知的発達に遅れのない発達障害児の現状と課題—全国知的障害特別支援学校のアンケート調査から—。秋田大学教育文化学部研究紀要, 教育科学, 67, 9-22
- 三輪久美子(2010)小児がんで子どもを亡くした親の悲嘆とケア。生活書院。
- 尾野明美(2017)障害のある子どもをもつ母親の子育てレジリエンス。教育と医学, 2017, 11, 34-41
- Strauss, Anselm L. & Corbin, Juliet M. (1999) Basics of qualitative research: grounded theory procedures and techniques. Sage Publications, Inc. 操華子・盛岡崇(訳) (2004) 質的研究の基礎—グラウンデッド・セオリー開発の技法と手順。医学書院。
- 鈴木浩太(2017)発達障害児をもつ養育者におけるレジリエンスとレジリエンシー。教育と医学, 2017, 11, 43-50
- 鈴木滋夫・武田鉄郎・金子健(2008)全国の特別支援学校〈病弱〉における適応障害を有するLD・ADHD等生徒の実態と支援に関する調査研究。特殊教育学研究, 46(1). 39-48